律法学者たちに用心すべきこと

ルカ福音書20:45-47、21:1-4
（新改訳2017訳）

20:45 また、人々がみな耳を傾けているときに、イエスは弟子たちに言われた。
20:46 「律法学者たちには用心しなさい。彼らは長い衣を着て歩き回ることが好きで、広場であいさつされることや会堂の上席、宴会の上座を好みます。
20:47 また、やもめの家を食い尽くし、見栄(みえ)を張(ば)って長く祈ります。こういう人たちは、より厳しい罰を受けるのです。」

21:1 イエスは目を上げて、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れているのを見ておられた。
21:2 そして、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨を二枚投げ入れるのを見て、
21:3 こう言われた。「まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、だれよりも多くを投げ入れました。
21:4 あの人たちはみな、あり余る中から献金として投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。」

【祈りながら考えよう】

（１）主が弟子たちに警告された律法学者たちにはどんな問題がありましたか。
（２）見せかけの宗教行為の五例を簡単に説明してください。今日の教会にどう適用できますか。
（３）金持ちたちとある貧しいやもめの献金から、主は何を教えようとされたのですか。

【解　説】

（１）律法学者たちに用心するように

また、人々がみな耳を傾けているときに、イエスは弟子たちに言われた。「律法学者たちには用心しなさい。」（45節）

イエスは、人々がみな耳を傾けているときに、弟子たちが今後陥(おちい)るかもしれない危険を察知(さっち)して、《**律法学者たちに**》用心するように警告として語られたに違いない。その危険は、今日の私たちキリスト者も耳を傾けて聞かなければならない警告である。

（２）見せかけの宗教行為の五つの実例

彼らは長い衣を着て歩き回ることが好きで、広場であいさつされることや会堂の上席、宴会の上座を好みます。また、やもめの家を食い尽くし、見栄(みえ)を張(ば)って長く祈ります。こういう人たちは、より厳しい罰を受けるのです。

①長い衣をまとって歩き回る

長い衣というのは、律法学者であることを表す服装である。律法学者たちは《**長い衣**》を着て、敬虔なふりをしていた。自分は律法学者なのだということを人々に見せびらかしていた。

当時、律法学者は一般の人々から尊敬されていたから、そういう衣服を着て歩き回ることによって、いい気になっていた。目立った服装をして、人々に認めてもらいたかったのである。

②広場であいさつされることを好む

《**広場**》であいさつされることが大好きだった。特別な称号(しょうごう)で呼ばれることが好きだった。これは単なるあいさつではなく、「ラビ、すなわち先生」と言われたり、「**わが主よ**」と言われて敬意を払われることである。

あるユダヤ教の律法学者は、あいさつをされた時、「先生」という敬称で呼ばれなかったがために怒ってしまったと言われている（**エルサレム・タルムード／ベラコート丸**）。マタイ福音書23章7-11節で主は次のように警告している。

広場であいさつされること、人々から先生と呼ばれることが好きです。しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただ一人で、あなたがたはみな兄弟だからです。あなたがたは地上で、だれかを自分たちの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただ一人、天におられる父だけです。また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただ一人、キリストだけです。あなたがたのうちで一番偉い者は皆に仕える者になりなさい。

③会場の上席や宴会の上席を好む

どんな人でも、自分が丁重に扱われる時、悪い気はしない。しかし、自分からそれを望み、特に会堂や宴会で人目に付く所に座りたがるのは、自己顕示(けんじ)以外の何ものでもない。

ユダヤ教の会堂では、上席というのは一段と高い所にしつらえられていて、会衆の方に向かって席があったから、出席者の注目の的となった。また宴会では最長老のラビが上席を占めることになっていたと言う。

④やもめの家を食い尽くす

旧約聖書では、やもめや孤児というのは、弱い立場の人々で、この人々を虐(しいた)げることを戒めている（**出エジプト22:22、申命記27:19等**）。この人々を保護しなければならない（**申命記10:18、詩篇68:5、146:9等**）。

ところが、律法学者たちは、彼らを保護することを口実に、やもめに近づき、やもめに与えられた財産の分与の裁定を助けるようにして、その実、自分たちが受け取ることのできる謝礼以上のものを受け取るようにしていた。

それだけでなく、やもめにとってラビを支えることこそ最も神に喜ばれることであると教え、彼女たちを食い物にしていた。こうした現実をご存知の主イエスは、そのことを指摘された。

主の弟子たちも、やがてキリスト教会の指導者として多くの人々を指導していかなければならない。その時、弱い立場にある人々の弱みにつけ込んで、その人々を食い物にしてはならないことを、ここで教えておられる。

初代教会においては、財産を持っている人々は、その財産を売って、貧しい人々を助けたり、主の働きが前進するために喜んでささげている（**使徒の働き2:45、4:32-37等**）。

⑤見栄を飾るために長い祈りをする

主イエスは、山上の説教の中で、偽善者たちの祈りについて、こう言われたことがある。

また、祈るとき偽善者たちのようであってはいけません。彼らは人々に見えるように、会堂や大通りの角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。（マタイ6:5）

ここでは、「**人々に見えるように祈るのが好き**」と言われている。彼らは神に祈るのではなく、神に祈っていることを人に見てもらうことが目的であった。

本当に神に祈っているのかどうかということよりも、祈っている姿を人に見てもらいたかった。だから、会堂や人の目につく大通りで祈ったり、長い祈りをしたがった。それは、祈りでも何でもない。祈りとは、何よりも神との交わりである。本当に神と交わっているかどうかが大切なことである。

（３）ある貧しいやもめの献金

イエスは目を上げて、金持ちたちが献金箱に献金を投げ入れているのを見ておられた。そして、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨を二枚投げ入れるのを見て、こう言われた。
「まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、だれよりも多くを投げ入れました。あの人たちはみな、あり余る中から献金として投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。」

①ある貧しいやもめの献金に感銘をお受けになった

宮の婦人の庭には、十三個のラッパ型の集金箱が取り付けてあった。

イエスは、《**金持ちたち**》が神殿の《**献金箱に献金を投げ入れて**》いるのを見ておられた。また、《**ある貧しいやもめ**》がその《**金持ちたち**》と非常に対照的な献金の行為に感銘をお受けになった。

金持ちたちはかなりの額をささげたが、貧しいやもめはレプタ銅貨二枚を投げ入れた。レプタは最小単位の貨幣（１デナリの128分の1／日本円で100円くらい）である。

神の評価では、彼女は金持ちたちがささげた総合計《**よりもたくさん**》ささげたことになる。金持ちたちは《**あり余る中から**》ささげたが、貧しいやもめは《**乏しい中から**》ささげたからである。

金持ちたちはほとんど負担を感じない程度の額をささげたが、《**この女**》は《**持っていた生きる手だちのすべて**》をささげた。この2つの対照的なささげ物によって、主イエスは何を教えようとされたのか。

②主が教えようとされたこと

彼女がこのように出来たのは、彼女の心には（神に対する深い感謝と愛）があったからである。この時にこのようなことが出来たのは、普段から、このような生き方をしていたからである。

神によって救っていただき、生きる喜びを与えられた者として、ごく自然にそれが出来たのである。

生活費全部をささげるのが立派な献金であると考えてしたのではない。また、主イエスがそこで見ておられたからそうしたのでもない。

だれが見ていなくても、神がすべてをご覧になっていると自覚していた。

律法学者たちは人の前で生きているのに対して、この貧しいやもめは神の御前に生きていた。律法学者たちと違うのはその点である。

私たちの所有物を（神からの恵みの賜物）として見る時、私たちも、貧しいやもめのようなささげ方ができるようになる。